

新しい科学コミュニケーション —科学をつくる立場から考える科学コミュニケーションの在り方—

東京大学大学院理学系研究科
横山 広美 (よこやま ひろみ)

2005 年は日本における「科学コミュニケーション元年」と呼ばれている。この年に3つの大学に、科学と社会の仲介役であるコミュニケーター、インタープリター養成コースが設置されたことによるが、科学コミュニケーションの定義や捉え方は人によって異なり、その活動も様々である。

ヨーロッパでは市民の自発的活動から始まった科学コミュニケーションであるが、日本では政策的側面が強く、一般への科学技術理解増進の延長上の活動である感を否めない。同時に理系研究者にとって科学コミュニケーション活動はボランティアの域を脱せず、自らの研究に科学コミュニケーションが大きな役割を果たすと考える人はほとんどいない。

今、若手研究者はかつてないほどの激化した競争の中で、細分化された科学を追う日々を送っている。自らの研究の歴史を知る機会もほぼなく、また他分野の常識に触れることもない。そのような中で新たな科学をつくることができるのか、その危機感は確立したシニアの研究者のみがもつ問題意識になっている。

このような現状の中で、科学コミュニケーションには2つの側面があると筆者は考える。ひとつは一般に向けて最先端の科学をわかりやすく楽しく示す活動、もうひとつは、理系研究者が自らの足元を見つめ将来の科学の在り方を考える研究者間のコミュニケーションである。どちらを欠いても、これからの理系研究者は社会の中での自らの立ち位置を確認し、将来の科学をつくっていくことは困難である。

ここでは天文学、高エネルギー物理学、分子生物学、惑星科学などの具体的事例がもつ共通点と問題点を俯瞰し、その間で行われている科学コミュニケーション事例を紹介しながら、新たな科学の在り方を考える「新しい科学コミュニケーションの在り方」を提示する。